様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ２１４９４

研究課題名（和文）中世寺院社会における宋代仏教儀礼の興行と文物受容に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A basic study on the performing and the material acceptance of the Song Buddhist rituals in the medieval temple society of Japan

研究代表者
西谷　功（Nishitani, Isao）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：８０７７３９２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、鎌倉時代の寺院社会で受容された宋代仏教儀礼の検討を通し、現在失われた儀礼の復元的考察、さらに特定の宋仏画の流行とそれを模した宋風仏像や仏画が制作される背景を検討した。
　従来唐物趣味・文人趣味の鑑賞用とされた釈迦像（草座・出山）・羅漢図をはじめ、祖師像・諸天像・涅槃図などの流行は、寺院内で実践される宋式の月課年課行事（自恣、布薩、成道、祖師忌、修正会など）の興行にともなうこと、各寺院がその諸儀礼を模倣することで制作されること、つまり仏像・仏画の制作背景には仏道実践があることをあきらかにした。
　これにより、東アジア的視座からの鎌倉仏教の見直しという新たな視点を提示することが可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来、東アジア的視座からの鎌倉仏教の評価としては、禅僧による禅思想・文化の請来が強調されていたが、その内実は宋代の諸宗で広く共有されたものであることを指摘し、入宋僧請来の思想・文化による鎌倉期の戒律復興運動や宋風文化受容の再検討をうながした。広く共有される宋代仏教＝禅仏教史観により捨象された思想・文化・美術の再発見を導いた。かかる成果として、『南宋・鎌倉仏教文化史論』を刊行した。
　また、本研究成果は、展覧会への参与（泉涌寺宝物館諸展示、「お釈迦さんワールド展」龍谷ミュージアムなど）や大学・博物館公開講座で公開することで、市民生活の文化的発展に寄与するものと考える。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we examined the Buddhist some riturals accepted in the temple society of the Kamakura period.
　Then, we examined the reconstruction of lost riturals, the trend of a certain Song Buddhist art for exsample Shakyamuni Coming out of the Mountain, Fasthing Buddha, Lohan paintings and more, and the background of the creation of an imitation Song dynasty-style statues and paintings that imitates it.The reason why these are prevalent is not related to enthusiasm for traditional Chinese imported goods as it has been said, but to be closely related to Buddhist practice.
　This makes it possible to present a new perspective of reviewing Kamakura Buddhism from an East Asian perspective.

研究分野：仏教文化史

キーワード：宋代仏教　鎌倉仏教　仏教儀礼　僧院生活　礼讃文　泉涌寺　涅槃図　羅漢図・羅漢像

１．研究開始当初の背景

平安後期に続発する飢饉・地震・争乱の原因を僧侶の破戒によるものととらえ、内省した僧侶たちが栄西・俊芿・明恵たちで、日本で失われた〈如法〉の戒律思想や僧制、儀礼文化、文物を宋地から請来し実践することで、〈如法〉の僧院生活復興を成し遂げたと考えている。

（1）しかし、思想史・宗派史研究中心の鎌倉仏教史像では、栄西は禅思想、俊芿は律・天台思想、明恵は華厳思想の請来者・復興者という理解が主流で、三者の交流や影響関係が論じられることは少ない。思想・宗派史研究の目的は、経論の読解、著作物の内容解釈などから、他宗・他派との思想的「相違」を明かにし、自宗・自派の優位性・正統性などの立場を明示するものだから、必然的に両者に優劣がつく。このような視点で語られる鎌倉仏教史像は、当該期の僧侶の実践的活動や寺院社会の実像からかけ離れた歴史像といわざるをえない。

（2）寺院に集積する文物・文化・儀礼・空間に関しては、美術史・考古学・国語国文学・建築史などによる研究蓄積があり、鎌倉時代の多様な文化の実態が解明されているが、それらも宗派史観を基底とするもので、また本来帰属していた「寺院という〈場〉」から抽出されたものが多く、その〈場〉に還元される研究もとぼしい。

２．研究の目的

本研究は、（1）鎌倉時代を中心とした寺院社会における宋代仏教の思想、美術作例、文化受容の諸様態を、従来、宗派史や思想史・美術史研究などで捨象された、寺院という具体的な「宗教空間＝〈場〉」、そこでの「僧侶たちの日常生活」「儀礼」を研究視角とし、宋代仏教の文物や文化受容の意義を再考することを目的とする。宋代仏教を直接受容した〈場〉における宋式儀礼と仏像・仏画などの関連性を明示し、同儀礼と文物が中世寺院社会で模倣・受容される宗教的意義、仏像・仏画の機能論や制作背景に新視点を提示することで、（2）従来の史観や研究方法では明らかにできない、鎌倉仏教の多様性に満ちた実態――人・文物の往来など――を実証的に考察する。

３．研究の方法

（1）従来の思想・宗派史研究で注目されない日課・月課・年課などの僧院生活における仏道実践の検討を行い、その「共通」項を見いだし、その背景に「宋代仏教」の影響があることを指摘する。「宋代仏教＝禅仏教」というイメージの再考を行うことにより、僧院生活・集団規則・日課月課年課儀礼などには顕著な宗派性（宗派意識）が存在しないことを実証する。

（2）南宋＝鎌倉仏教の影響関係と超宗派的な儀礼・文化の共通項の視点から、入宋僧請来の文物（規則書・儀礼次第書・仏教美術・生活資具）の情報収集とその調査を行う。得られた成果を「寺院という〈場〉」に還元し、鎌倉時代の僧院生活や儀礼の実態を多面的に復元する。

（3）宋式の僧院生活・儀礼実践の視点から、この復元で用いられた宋請来の仏像・仏画を模刻・模写したいわゆる「宋風」の仏像・仏画の調査を行う。美術史を中心に鎌倉時代には一般的に宋請来の仏像や仏画を写す行為が流行すると指摘されるが、その理由は「唐物嗜好」と述べら

れるにとどまる。本研究では、宋風文化の受容や宋請来文物の模刻・模写という行為は、入宋僧請来の宋式僧院生活と儀礼の広がりと連動する宗教的営為であることを実証し、宋風文物を所持する寺院空間における宋仏教受容の可能性を検討する。

４．研究成果

（1）入宋僧の宋地における宗教実践を検討するために、泉涌寺開山俊芿の伝記『不可棄法師伝』（寛永本、泉涌寺蔵）・戒光寺開山曇照の伝記類『北京戒光律寺古記』（16 世紀、戒光寺蔵）、および儀礼次第書『南山北義見聞私記』（14 世紀、泉涌寺蔵）の翻刻を行い、『南宋・鎌倉仏教文化史論』（勉誠出版、2018 年、pp.529-555, 569-577, 579-724、図書①）として刊行した。戒光寺に関しては考察も行った（「入宋僧曇照の行状―鉄翁守一との邂逅の「場」を中心に―」、図書①、pp.201-242）。

（2）泉涌寺の年課儀礼である修正会で実践される「金光明懺法」儀礼の検討を行い、現行の儀礼が泉涌寺創建期までさかのぼる宋式儀礼であること、さらに宋式儀礼実践にともなう儀礼本尊のひとつ諸天像（図）や儀礼次第書の存在から同儀礼が東福寺・三聖寺でも実践されていたことをあきらかにした。現行の泉涌寺金光明懺法の次第書は、泉涌寺首座・東林寺長老・三聖寺長老・戒光寺長老ほかを歴任した浄因（1217-71）の編集によるものであり、彼は東山周辺の宋式（宋風）諸寺院の要職を務めている。三聖寺での実践は、浄因の影響を考えてもよく、また「宗派」を超えた儀礼の存在としても注目される。

　さらに、愛媛・石手寺蔵「諸天図」二幅は調査により現行の泉涌寺本と完全一致することが判明した。それに加え、石手寺近郊に泉涌寺流の繁多寺が存在することを踏まえれば、中世後期に泉涌寺流の地方寺院で宋式金光明懺法が実践され、そして地域で宋式儀礼文化が受容されていたことを想定させるものとして重要である。この成果は、「宋式「金光明懺法」儀礼の請来と展開―泉涌寺を例として―」（図書①、pp.405-434）として公刊した。

（3）入宋僧請来の寺院生活文化の実態解明のために、入宋僧が滞在した時期に制作された羅漢図作例の収集を行った。大徳寺伝来五百羅漢図（12 世紀、南宋）をはじめとする日本伝来の羅漢図の多くに当該期の僧院生活が反映されたと思われる図像があり、儀礼次第書や規則書類（「泉山僧堂浄式」、浄土寺蔵。図書①、pp.725-737）を参考にして図像読解を行い、南宋＝鎌倉の諸寺院で共有された生活習慣や文化の実態を解明した（雑誌論文①③、学会発表①③⑨⑪）。本成果により、入宋僧創建の宋式寺院では南宋仏教の規則にもとづく僧院生活が実践されていたことが実証され、日本僧は宋式寺院に参学することで、入宋せずとも宋代仏教を疑似体験することが可能な社会が成立したことをあきらかにした。そして、疑似体験した僧侶が寺外で活動することで、宋代仏教文化が鎌倉時代に流行するという見通しを得た。

　さらに泉涌寺や戒光寺の羅漢儀礼の実例を提示し、両寺で実践される羅漢儀礼が南宋で信仰された天台山石橋の五百羅漢にもとづく点もあきらかにした（「泉涌寺の「生身」羅漢―「汗」をかく羅漢伝承の背景―」、図書②、pp.159-187）。

（4）いわゆる「苦行釈迦」と称される一群の釈迦像の再検討を行い、儀礼空間に再置した。「苦行釈迦」とは、釈迦が苦行を捨てて山を降りる場面を描いたとされる「出山釈迦」とその苦行

時の断食した姿を描く「草座釈迦」であり、ともに「このような厳しい修行では悟りを得ることができない」ことを主題とするという。しかし、この解釈にしたがうならば、なぜ釈迦の存在を否定するような主題が寺院で制作され、伝来する説明がつかない。

本研究では、改めて文献資料や関連する美術資料を収集し、悟りを得たことを示す光背をともなう出山釈迦に対し礼拝する羅漢を描く「釈迦十六羅漢図」の発見にもとづき出山釈迦が礼拝対象であることをあきらかにし、出山釈迦が成道会（12 月 8 日）、草座釈迦が自恣儀礼（7 月 15 日）の本尊であることを突き止めた（学会発表⑩、雑誌論文⑧）。本成果は、「お釈迦さんワールド」展（龍谷ミュージアム、2018 年）で取り上げられることとなり、新出資料を含む関連作例の調査が行なわれ、展覧会図録として公刊されている（雑誌論文⑤、学会発表④）。また、展示期間中に所蔵者・研究者から新出の出山・草座釈迦の作例情報の提供を受けた。その傾向は、特定の宗派性は認められず、〈如法〉年課儀礼の実践にともなう本尊制作ととらえることができる。なお、本考察により、儀礼が実践されなくなることで、本来の機能が失われ、別の新たなイメージや解釈が付帯する事例を確認することができた。

（5）宋代に霊験をあらわすとして信仰された仏牙舎利に関して、資料収集を行い、その概要を論じた（雑誌論文⑥）。泉涌寺にはこれらの信仰を背景として請来された仏牙舎利を所蔵しており、その来歴や伝承を記す資料の翻刻（図書①、pp.557-567）と考察（雑誌論文②、学会発表⑥⑧）を行った。

（6）鎌倉時代における宋代仏教受容の史的背景とその特質を探るため、奈良・平安期の寺院社会の検討や僧院生活の実態に関する通史的研究を行った。鎌倉時代における宋代仏教の請来背景には、東アジア寺院社会から逸脱し「独自」に展開した平安期の寺院制度や戒律を重視しない僧侶たちによる〈如法〉の僧院生活と儀礼の廃絶が原因であることを示し、それを内省した僧侶たちが、再び東アジア仏教と「共有」される僧院生活や儀礼の復興を企図したものであることをあきらかにした。本成果は、「〈規則〉からみた南宋仏教請来の意義」（図書①、pp.1-49）で公刊している。

以上、中世寺院社会における宋代仏教儀礼の興行と文物受容に関して、仏道実践の「場」として機能した寺院でどのように使用されたのかを具体的に例示し、その仏道実践の広がりとともに宗派を超えて文物が造像・模刻（模写）され、受容・展開するという新しい図式を提示した。

このように、宋代仏教文化史的視座にもとづく文物や儀礼研究から提示可能な鎌倉仏教史像は、従来のイメージと大きく異なるものであり、仏教思想史を中心とする宗派史観的視座が多い鎌倉仏教史研究、それに依拠する美術史・考古学・国語国文学・建築史などの関連分野に対しての再検討を促すものといえよう。従来、思想修学中心で研究されてきた僧侶の交流や寺院への参学は、思想とともに、上記したような生活習慣・儀礼などを修学・実践し受容していたことを視野に入れなければならない。

さらには、本研究で得られた成果は「寺院という〈場〉＝僧侶社会」という狭義的意味にとどまるものではない。この〈場〉は、在家信者たちの信仰の〈場〉、技能集団（工人）の宋風文物制作の〈場〉としても機能している。報告者は、在家信者や工人たちが宋代仏教文化や生活風習に接することで、寺外に宋風文化が展開していくと想定している。本成果は、寺院社会のみならず広く中世社会の実像を考えるうえでも重要な視点になるといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 9 件）

① 西谷　功、大徳寺伝来五百羅漢図から復元される僧院生活、徹底討論　大徳寺伝来五百羅漢図の作品誌―地域社会からグローバル世界へ―、査読無、2019、pp.155-181
② 西谷　功、〈舎利〉―泉涌寺との関わり、観世、査読無、85（10）、2018、pp.26-34
③ 西谷　功、入宋僧請来の「つかり湯」式浴室、日本歴史、査読有、845、2018、pp.77-79
④ 西谷　功、釈迦への思慕とその儀礼―宋代仏教の視点から、お釈迦さんワールド、龍谷大学龍谷ミュージアム展覧会図録、査読無、2018、pp.220-229
⑤ 西谷　功、草座釈迦とその儀礼―泉涌寺を事例に、お釈迦さんワールド、龍谷大学龍谷ミュージアム展覧会図録、査読無、2018、pp.144-146
⑥ 西谷　功、仏牙舎利、韋駄天、普陀山観音と宋代仏教文化―泉涌寺僧による「唐物」の請来と展開、唐物 KARA-MONO、金沢文庫展覧会図録、査読無、2017、pp.97-102
⑦ 西谷　功、京都・悲田院の宝冠阿弥陀如来坐像、究極の美仏　運慶と快慶、査読無、2017、pp.128-129
⑧ 西谷　功、釈迦十六羅漢図、国華、査読有、2017、1458、pp.40-43
⑨ 西谷　功、泉涌寺の文化財―儀礼と信仰の視点から―、国華、査読有、2017、1458、pp.21-26

〔学会発表〕（計 16 件）

① 西谷　功、東アジアからみた鎌倉時代の戒律復興運動、戒律の思想と儀礼文化（龍谷大学 BARC 学術講座）、2018
② NISHITANI, Isao 西谷　功、Buddhist Patriarch Portrait Rituals and their Adorned Spaces: The Sennyūji Temple as One Example 祖師肖像画を用いる仏教儀礼とその荘厳空間、Display as an Ensemble Program Interdisciplinary Approaches to Display in Premodern Japan, Sainsbury Institute、2018
③ 西谷　功、大徳寺伝来「五百羅漢図」から復元される僧院生活、徹底討論：大徳寺伝来五百羅漢図の作品誌、九州大学 Progress 100 人社系学際融合リサーチハブ形成型、2018
④ 西谷　功、釈迦をめぐる儀礼とその空間、開祖の生涯の可視化と儀礼空間、龍谷大学龍谷ミュージアム・美術史学会、2018
⑤ 西谷　功、知られざる宋代天台の儀礼と文化、天台の思想と造形、文化、儀礼（龍谷大学 BARC 学術講座）、2018
⑥ 西谷　功、鎌倉時代における中国祖師肖像画の受容と宋式仏教儀礼、美術史学会東支部大会、2017
⑦ 西谷　功、入宋僧と普陀山観音信仰、唐物と東アジアの海域交流（金沢文庫）、2017
⑧ 西谷　功、泉涌寺仏牙舎利と謠曲〈舎利〉、〈能と仏教〉研究会例会発表、2017
⑨ 西谷　功、入宋僧のみた風景、もたらした中国文化、花園大学京都学講座、2017
⑩ 西谷　功、いわゆる「苦行釈迦」像とその儀礼、東アジア美術における仏伝の表象（稲本泰生代表科研）、2017
⑪ 西谷　功、泉涌寺における中国宋代の仏教儀礼と文化、第 130 回公開講座「鎌倉禅研究会」、2017
⑫ 西谷　功、俊芿律師と泉涌寺、京都国立博物館土曜講座、2017
⑬ 西谷　功、泉涌寺創建と南都戒律復興運動、連続講座「忍性菩薩を学ぶ」（金沢文庫）、2016
⑭ 西谷　功、釈迦如来像とその儀礼―宋代江南地域の事例から、中央アジア仏教美術の研究（宮治昭氏代表科研）、2016
⑮ 西谷　功、泉涌寺における宋代律宗の儀礼と文化、奈良国立博物館夏期講座、2016
⑯ 西谷　功、泉涌寺の仏像・仏画と儀礼、655 回れきはく講座（大津市歴史博物館）、2016

〔図書〕（計 2 件）

① 西谷　功、勉誠出版、南宋・鎌倉仏教文化史論、2018、840p.
② 西谷　功ほか、勉誠出版、画期としての室町―政事・宗教・古典学、2018、544p. pp.159-187

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：

国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。